

梅雨入りした。紫陽花の季節となった。紫陽花はガクアジサイを原種とする日本固有の花で万葉集にも登場する。梅雨は日本の特徴的な季節である。梅雨と紫陽花と日本の風土は一つながりの関係にある。

日本の夏は梅雨が明けても湿度が高い。中国にも梅雨があるそうだが、中国は全般的には乾燥している。島国と大陸の違いである。

漢字を始めとして多くの文化が中国からもたらされている。西洋人と比べ、中国人の外見は日本人に近く、西洋人には区別が付き難いようだが、接してみると違いは明確である。

漢方・鍼灸もまた、中国から来たものである。現在でも中国で書かれた『黄帝内経』や『傷寒論』はその最も重要な古典であることに変わりはないが、同じ古典を仰ぎながら、中国と日本では多くの違いがある。

中国からもたらされた漢方・鍼灸も、紫陽花が咲き、夏に多湿であるという日本の風土、そしてそうした風土に育まれた精神性の中で変容・発展した。そして江戸時代に日本的な漢方・鍼灸として開花したのである。

日本的な文化には道に高めるという特徴がある。茶の湯が茶道に、剣術が剣道に、柔術が柔道に高められた。それは物事を通じておおいなるものと一体となるというようなものである。それは繊細さ・簡潔さにもつながっている。

吉益東洞が完成させた古方漢方は日本的な漢方である。基本的に『傷寒論』や『金匱要略』に出ている漢方薬しか使わない。それらを組み合わせたり、それらに薬味(生薬)を加えたり、取り除いたりすることで全ての病態に対応した。現代中国の中医学など他流派に比べて、基本の漢方薬の数も、それに入

っている薬味の種類も限られ少ない。

吉益東洞の言葉を引用しよう。「医者は、病を治すものなり。病を治すは方なり。故に医の学は方のみという。しかれども、道を得ざる人の方を処するは、死物になりて、動かす力は、道によりて活動するものなり。」道を得てない人が処方する漢方薬は死物である、と言っている。病態に合わせ、的確な使い方をしなければ効かないわけである。

日本の鍼灸では通常、管鍼が使われている。中国鍼より細く、管を使うことで刺し易くしてある。これを創案した杉山和一が祭られている神社から、一昨年、『杉山真伝流』が発見された。その中には次のような言葉がある。「凡そ鍼を刺さんと欲する時、先ず黙坐静思し、心を意に合わせ適<sup>かな</sup>わせしめ、言を出さんと欲せず・・」。一般の方には私たち鍼灸師がこんな事を考えているとは思ってもよらないのではないか。盲人であった杉山和一は將軍綱吉の病を治し、その援助で鍼治学問所を開いた。盲人の職業として鍼灸・按摩が一般化したのはこれによっている。

残念ながら、江戸時代に開花した日本的な漢方・鍼灸は明治以後の近代化の中、衰退してしまった。道は廃れ、頭でっかちな学ばかりが偏重した。専門的な世界だけではない。道という言葉は重過ぎるが、現在は家事・子育てにおいても、体験の中で知恵を得ていこうとはせず、本や専門家からのご託宣に頼り過ぎている。

紫陽花が咲く風土に生まれた、日本的な道が再興されるべき時代にあると思う。あらゆる職業・生き方において道はある。

(2005年6月入梅の頃)

参考:『吉益東洞大全集』(いざわ書店)、『鍼灸による日本的ないやしの道』(横田観風著)、『杉山真伝流』(和訳・注釈:大浦慈観)